

展示事業と調査研究に関する相関表

館名: 国立国際美術館

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
14	企画展	「福嶋敬恭 こころの中のこころ MIND OF UNIVERSE」	14.4.11～14.5.28	福嶋敬恭に関する調査研究	1960年代以降、単純で明快な形態と色彩による新しい抽象彫刻を制作してきた福嶋敬恭の、初期から新作までを集めた初めての大規模な回顧展となった。準備期間中には、約40年にわたる創作活動を跡づける文献資料を収集整理し、詳細な年譜、文献目録等を作成。展覧会の展示計画、図録の内容等に反映させることができた。(担当:安来)	
14	企画展	「イタリア抽象絵画の巨匠 アフロ ブリッ フォンタナ」	14.6.6～14.7.21	イタリア抽象絵画に関する調査研究	20世紀美術の変革者として有名なブリッ、フォンタナと共に、伝統的な抽象絵画を制作したアフロを、日本に於いて初めて紹介した。フォンタナ作品の＜空間概念＞の作品の変遷について詳細に調査研究を行い、当館に所蔵されているフォンタナ作品の位置を再確認すると共に一般の鑑賞者に20世紀美術の多様な表現を実感できる機会となった。(担当:中井)	
14	特別展	「いま、話そう 日韓現代美術展」	14.8.1～14.9.10	日本及び韓国の女性現代美術作家に関する調査研究	韓国国立現代美術館の学芸員と共に、ソウルと大阪において合同の現地調査を実施したことにより、日本及び韓国の現代女性作家の活動が明らかとなり、とりわけ1990年代以降近年の状況について、紹介することができた。(担当:加須屋)	
14	共催展	「20世紀版画の巨匠 浜口陽三展」	14.9.19～14.10.27	浜口陽三に関する調査研究	当館に寄贈された浜口作品資料を分析し、浜口の版画がどのように成立したかを、分かりやすく展示することができた。 また、今展覧会の調査を兼ねた浜口陽三全版画集2000年に出版しているが、今回の展覧会では、さらに調査を重ね、これまでに明らかにされてこなかったエスキース、試し刷り等と本作品の照合を行い、浜口作品がどのように完成していくのかを詳細に解明することができた。 また、その調査結果を今回の展覧会図録に反映させ、一般の鑑賞者にもその成果を紹介することができた。(担当:中井)	日本経済新聞社

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
14	企画展	「畠山直哉写真展」	14.11.7～14.12.17	畠山直哉に関する調査研究	1990年代半ばから国際的に注目を集める写真家で、初期から最新作までを初めて回顧した。ニューヨークでの個展を始め、ヴェニス・ビエンナーレ及びドイツの個展での出品作並びに国内所蔵の写真作品をすべて実見、調査した結果、石灰石鉱山を主題とした『ライム・ワークス』や都市の地下をとらえた『アンダーグラウンド』などの連作との対比を展示に生かすことができた。同展の開催が作者のその後の活躍を後押しした。(担当:島)	
14	海外交流展	「目撃者 安斎」	14.9.7～14.10.6	安斎重男に関する調査研究	安斎のアトリエへ出向き調査を重ね、また、グンケル・シュトゥーキ現代美術ギャラリーの館長を招いて共同調査を実施し、作品選定に当たっても年密な打合せを重ねた結果、安斎重男のドキュメンテーションを中心とした作品をポーランドで初めて展示することによって、日本の1960年代以降の美術シーンの一端を紹介すると共に、記録の持つ意味について再度検討する機会を得ることができた。(担当:加須屋)	
15	企画展	「鳴剛 - もう一つの眼差し - 」展	15.4.3～15.5.18	鳴剛に関する調査研究	1968-70年の現代日本美術展、日本国際美術展等へ日本の現代美術が紹介された展覧会の傾向を詳細に調査研究をすることにより、戦後日本美術の抽象的あるいは概念的傾向の反動として、写真的視覚を意図的に取り入れた鳴の作品を紹介し、一般の鑑賞者に一元的ではない日本の現代美術を紹介することができた。(担当:中井)	
15	企画展	「高柳恵里」展	15.5.29～15.7.21	高柳恵里に関する調査研究	公立美術館での現代美術のグループ展に過去約10年に渡りほとんど毎年選出されてきた高柳の活動を再調査研究し、美術館レベルで初めて大規模な個展として結実させ、広く注目された。展示台と作品、鑑賞者と作品との関係を緊密に考慮した展示を行うことができた。また、作家の活動の再認識と再評価につながり、複数の美術館のコレクションに収まる端緒にもなった。(担当:中西)	

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
15	企画展	「ヤノベケンジ - MEGALOMANIA - 」展	15.8.2 ~ 15.9.23	ヤノベケンジに関する調査研究	大阪を活動拠点にするヤノベケンジの初めての大回顧展となった。 アトリエでの新作制作に立ち会いながら、作家と展示プランやコンセプトについて討議を繰り返し、同時に作家が私蔵している幼少期から現在までの個人的資料を調査することによって、これまで個別に理解されてきたヤノベの各作品を、初期から新作まで、大阪万博との関係の中で捉え直すことができた。大阪万博跡地での幼少期の体験は、ヤノベの創作活動の原点となっており、その意味で万博跡地に建つ旧国際美術館での展示は、ヤノベの作品を研究する上で不可欠なものであった。 また、ヤノベのこれまでの集大成とも言うべきこの展示によって、「未来の子どもたちへ」という新しいヤノベ作品の方向性が生まれた。(担当:平芳)	
15	特別展	「大地の芸術 クレイワーク新世紀」	15.10.9 ~ 15.11.25	クレイワークに関する調査研究	造形素材としての土に注目し、土による立体造形の可能性について独創的な創作を展開する9人の日本人作家の近作を紹介した。調査段階では、個々の作家への詳細な取材と資料の分類を行い、また現代陶芸に関する資料を収集整理する中から、主に1990年代以降の現代陶芸の方向性を検証することができ、その研究の成果を展示に反映させることができた。(担当:安来)	
15	企画展	「川崎清 美術館建築とその周辺」展	15.12.4 ~ 16.1.18	川崎清に関する調査研究	千里万博公園の旧館最後の展覧会。京都の川崎清事務所においてスタッフとの打合せを継続して行うと同時に、川崎の栃木及び京都の建築作品を現地調査した結果、旧館の建築を手がけた川崎清の美術館建築について、これまでまとめて紹介する機会のなかった川崎の建築思想を、模型やパネルを用いつつ分かりやすく、総合的に展示した。(担当:加須屋)	
16	企画展	「オノデラユキ」展	16.11.3 ~ 16.12.19	オノデラユキに関する調査研究	パリと東京を拠点に活躍するオノデラの美術館レベルでの初個展。国内の美術館及びギャラリーに所蔵の作品を実見・調査すると共に日本とパリにおいて文献類の収集、調査、整理を行った。日常的に見慣れた物がオノデラの撮る写真では、どこか不可思議なイメージに変形されて表される。そのイメージの連鎖の解明し、この10年のオノデラの仕事を簡潔にまとめた展示として評価された。(担当:島)	

年度	区分	展覧会名	開催期間	相関する研究名	調査研究の展示事業への反映内容(具体的に)	備考(共催者等)
16	共催展	「マルセル・デュシャン」展	17.2.5～17.4.17	マルセル・デュシャンに関する調査研究	フィラデルフィア美術館を始めとする海外の主要美術館に調査に赴き、それらとの友好関係を築くことによって、借用困難なデュシャンの初期作品を数十年ぶりに日本で展示することを実現した。また5年にわたり、アメリカ、フランス、スイス、東京、他各地の作家のもとに赴き、現地で作家への聞き取り、ならびに資料調査の結果、日本・アメリカ・ヨーロッパそれぞれにおける、第二次世界大戦後から現代までの半世紀に及ぶデュシャンの影響を、網羅的に跡づけることができた。 その調査に基づき、従来のデュシャン解釈に対して、「現代美術との関係」という新たな視点からの展示を行った。 (担当:平芳)	朝日新聞社